

美術史と民族学

岡谷 公二

私が関心を持っているのは、美術史そのものではなく、美術史と他の分野、たとえば文学や民族学との接点である。書けるかどうかは分からないけれども、私は一冊の本の計画を持っている。題して「絵画と民族学」。

民族学と文化人類学とは、同じ学問だが、西欧の民族学 *ethnology* と、アングロサクソン系の *cultural anthropology* とは、ニュアンスが微妙に異なる。民族学は、西欧の植民地支配と深くかかわってきた学問であり、どこかに贖罪の匂いがあるのに対し、アメリカの文化人類学は、もつとあっけらかんとしている。

民族学は、西欧からしか生まれえない学問である。それは他民族の文化への関心にとどまらず、自民族の文化に対する疑問、場合によっては否定から出発しているからだ。

このような関心は、エキゾチズムと結びついて、十九世紀後半から二十世紀にかけて、ひとつの大きな思潮を形作る。民族学の誕生も、ポール・ゴーギャンのタヒチゆきも、ダダ・シュルレアリスムの運動も、こうした風潮の中から生まれてきた、とすることができ。

画家たちも、この風潮とは無関係でありえなかつた。私は、美術史の流れに即しながら、彼らとこの風潮とのかわりを辿つてみたいのである。

出発点に位置するのは、ウージェーヌ・ドラクロワである。一八三二年の彼のほぼ半年にわたるモロッコ旅行は、彼の絵画の発展のターニング・ポイントとなつただけでなく、大げさに言えば、近代絵画のそれともなつた。彼は、北アフリカの強烈な光の中でくらし、色彩家との自覚を

深めただけでなく、西欧文明に対する疑いを抱くことともなつた。

「私はパリにあきた。モロッコから帰つてみると、人も物も違つて見える」

「コルセットやきちつとした靴や窮屈な服を着たわれわれは哀れだ」

これは、帰国直後の彼の日記の中に見える言葉である。

ドラクロワのモロッコ旅行が刺激の一つともなつて、十九世紀前半に流行したオリエンタリズムの絵画も、もちろん同じ風潮の中のものである。しかしここからは、西欧への懷疑は生まれなかつた。ドカンやジェロームのような画家にとつて、オリエンタリズムとは題材の珍奇さを出るものではなかつたのである。

その点でドラクロワを受けつぐのは、マネと印象派の人たちである。イル・ド・フランスのおだやかな風景を描き、一見きわめてフランス的に見える彼らの根底にある南方に人々はあまり注意しない。彼らの南方体験は、直接作品を生み出してはいないけれども、彼らの絵画の展開の上で、きわめて重要な役割を果たしている。

マネは、画家として立つ前、海軍士官学校入学のための準備をかねて、約一年間南米航路の船に乗りこみ、熱帯を知つた。モネは一八六一年から二年にかけて、アルジェリ

アで軍隊生活をおくり、後年「そこでどれほど多くのものを私が学んだか、どれほど眼が肥えたか、あなたには想像がつかずまい。私も最初、そのことに気付きませんでした。かの地で見た光と色彩の印象は、後にならなければ、その意味が分からなかつたのです。私のそれ以後の探求の芽は、そこにあつたのです」と、友人あての手紙に記している。

ピサロは、亜熱帯の島である西インド諸島の一つセント・トマス島の出身であり、パリに赴く前、一八五二年から足掛け三年間南米のベネズエラに滞在している。

こうして熱帯の光を知つた彼らの目に、新古典主義の絵がどれほど暗く、陰気に見えたかは、容易に推測がつく。印象派とは一面において、西欧の絵画の中に南を持ちこむ試みだったのである。そう考えなければ、彼らの絵の、従来の絵画とは全く異なる明るさを理解できない。

付け加えるならば、セザンヌとフレデリック・バジルは南仏の出身であり、ドガは、一八七二年から三年にかけて、アメリカ南部のニュー・オリアンズで暮している。印象派の誕生の時代、南と全くかわりのなかつたのは、シスレーとルノワルくらいだ。そのルノワルも晩年は南仏に居を定める。

ゴッガンとゴッホは、印象派の否定者と一般に考えら

れているが、印象派の中の「南」はあきらかに受け継いでいる。ゴーギャンの南方体験についてはあらためて書くまでもないけれど、ゴッホもまた「南方のアトリエ」を夢み、「絵画の偉大なルネッサンスの将来は熱帯にある」と考えた人間だった。

民族学が西欧で真に確立されるのは、二十世紀の初頭である。アンリ・ルソーの一連のジャングル風景、黒人彫刻へのピカソらの関心、マチスの北アフリカ旅行、クレーを色彩家へと変貌させたチュニジア旅行は、民族学の視点からもう一度見直してみる必要がある。

ダダとシュルレアリスムは、キリスト教と合理と秩序を基礎とする西欧文明の全否定からはじまった。当然彼らの眼は、ヨーロッパ以外の世界、とりわけ南方——アフリカ、オセアニア、中南米——に向く。シュルレアリスムの中から、ミシュル・レリスのような民族学者が生まれてきたり、マッタやウィルフレッド・ラムのような中南米や西インド諸島生まれの画家たちがあらわれるのは、ごく当然のことなのである。

*